

8

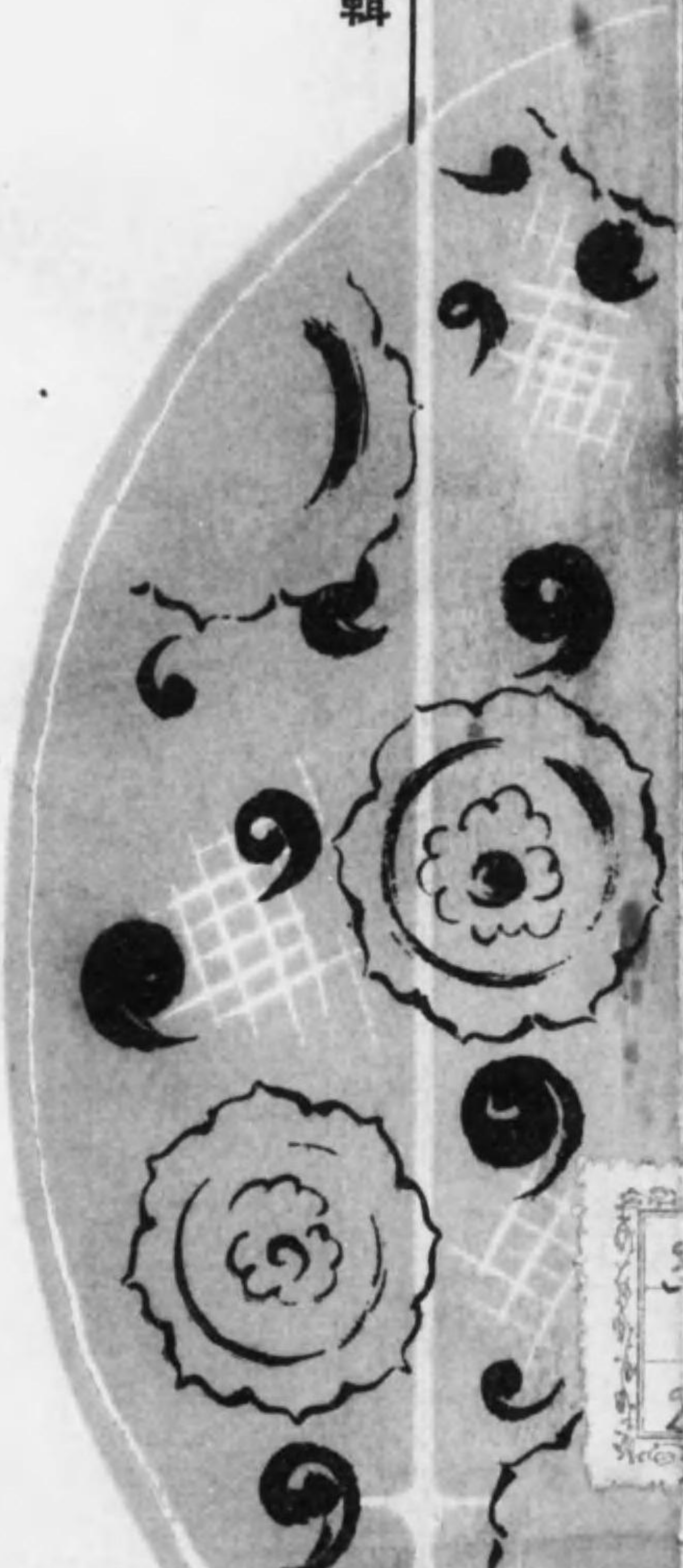
日本精神とは何ぞや

日本大學教授 高須芳次郎著

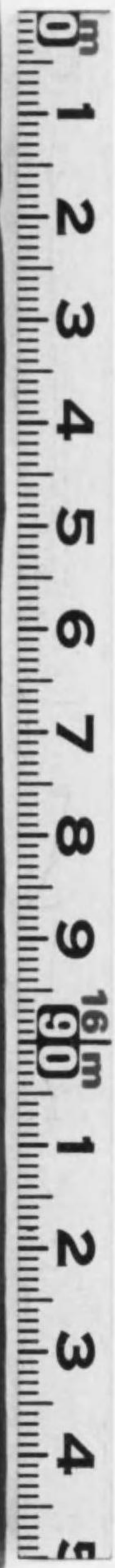
特255

717

第三輯



日本精神協會發行



始



特255
717



日本精神パンフレット

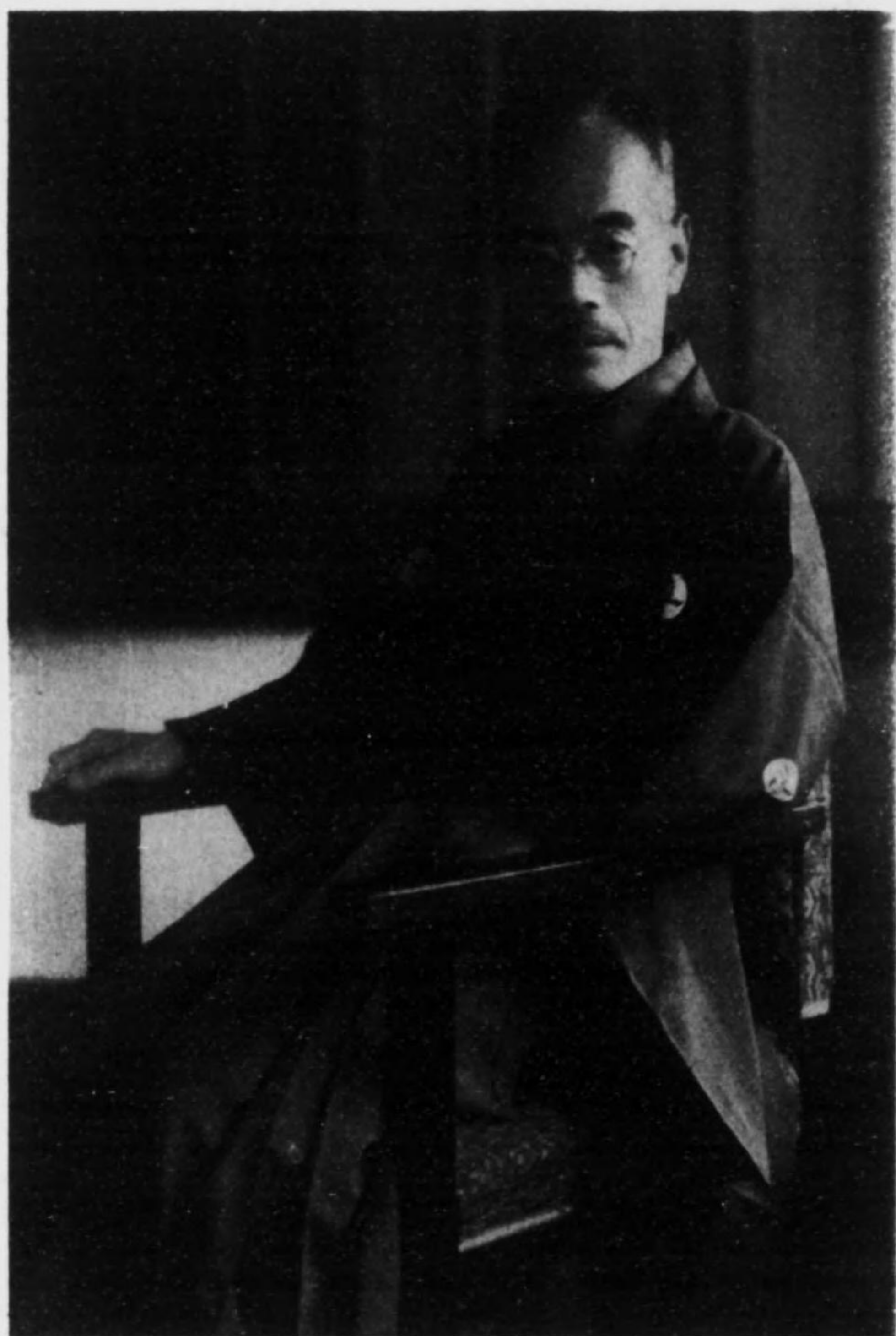
第三輯

日本精神とは何ぞや

高須芳次郎著

日本精神協會





高須芳次郎先生近影



日本辭林と其の歴史

日本辭林六十年史
復三輯

高須芳次郎著

日本辭林會



序

今や西力東漸の時代は去つて、東力西漸の時代が來た。云ひ換へると西洋の文化が東方に對して優越な勢力を示した時代は、茲に解消し、東方を代表するところの日本精神文化の光が西洋を照らす時代となつたのだ。茲に一つの大きな意義がある。この數年來、日本精神の叫びが高いのも、つまり、東力西漸を象徴することにほかならぬ。即ち日本精神文化は、その生命主義的な宇宙觀と「忠孝貞」の三十徳とを以て、行詰つた西洋文化に一つの新しい光明を與へ、また國內的には、一切の問題を解決すべく、独自の精神文化力によろうとする必然性を見るに至つた。

この際、「日本精神とは何か」といふことをはつきり、意識し、自覺することが、

何よりも大切である。世上、日本精神の意義について、往々、精確な把持を缺くものがあるのは、大きい缺點であると思ふ。依て私は茲に大衆的に日本精神の内容を説き、出来るだけ精確にその意義を把持し得るよう、用意したつもりである。唯紙数の制限上、日本精神のもとに、いかに政治經濟を革新するか、いかに社會問題を解決するかといふ事に觸れることが出来なかつたのを遺憾とする。この點については、拙著『非常時の日本を如何にすべき乎』（大阪屋書店刊行、一部一回五十錢）を参照熟讀されんことを切に要望する。

昭和十年二月十日

將に紀元節を迎へんとする日本晴の日

高須芳次郎謹識

日本精神とは何ぞや

目次

一、日本精神とマルクス主義……………七

二、日本精神學の知識……………九

三、國學と水戸學……………一四

四、大日本史の三大特筆……………一八

五、不朽の二大名著……………二三

六、會澤正志と山鹿素行……………二五

七、日本精神とは何ぞや……………二七

八、日本思想史上の二大現象……………二元

九、歐米追隨を排して日本的自覺へ……………三

一〇、國民性に立脚した文化創造……………三

一一、日本精神の基本原理……………七

一二、天壤無窮……………六

一三、祭事即政治——マツリゴト……………四

一四、義は君臣、情は父子……………四

一五、唯物哲學に對する疑問……………四

一六、物心を統一する大生命力——日本精神哲學原理……………五

一七、忠孝についての現代的解釋……………五

一八、中正の態度と調和美……………六

一九、日本特有の文化的能力……………六

二〇、日本精神を基本とした新教育……………六

日本精神とは何ぞや

高須 芳次郎

一、日本精神主義とマルクス主義

少し話は古いが大正九年頃のことである。ある晩、寓居の近くにある江戸川邊をぶらぶら散歩した。その時、私の頭は、思想問題で一抔になつてゐた。それは、丁度、マルクス主義が旺んになりはじめようとした時代で、思想界は大分、動搖しつゝあつた。そして私は、毎晩、散策に出ると、將來、日本の思想界を正しい方向に赴かしめるについては、どうしたら宜いだらうかと、いろいろ苦悶し續けたのである。

私は、この苦悶期に先立つて、大正三年、歐洲大戰直後に、雑誌「新評論」で、日本精神主義を唱へたことがあるが、その時、眞に共鳴したのは、故木村鷹太郎氏のみであつた。氏は長文の手紙をよせて私を激勵して下さつた。また故土田杏村氏が、多少、私の立場を諒解して、毎號、

半年ばかり続けて、文明批評を書いてくれた。けれども大體において、有力な反響を得ることが出来ぬ。勿論それに失望はしないが、聊か物足りなく思つたことを今も忘れることがない。が左様した爲めに、私は私の信條を捨てようとは、無論、思はなかつた。元來、私は歐洲大戦と共に、その文化の頹廢を察し、今後、ヨーロッパ方面から有力な、新思想、新學説が生れないと考へた。それ故、日本は思想上、ヨーロッパに手頼らないで、日本自身の有する独自の思想に立脚し、それによつて、正々堂々と進まねばならぬであらうことを信じないでをられなかつた。以上の點からすると、日本精神主義を提唱することは、必ずしも不當でないといふのが、その當時に於ける私の眞情だつた。

けれども當時、思想方面に關心を持つ人々の多くは、ヨーロッパ思想追隨の傾向を多分に示し日本精神主義など云つても、丸で相手にしない。従つて、私の思想的立場は、可なり困難で、捗捗しい展開を爲さないうちに大正九年となつたのである。その時分、私は一應、マルクス主義をも研究して見た。勿論それは、歐米追隨者の如く、頭から無批判にマルクスに對するのではなくその長短、是非について、冷靜に批判を加へたいといふ意味から、マルクスの書物を見た。その結果、私は、マルクスの學説のうちには、一部分、プロレタリア救済の志向において――

執るべきところもないのではないが、概して餘りに唯物的な考へに固まりすぎてゐるといふことを、どうしても認めないわけにはゆかなかつた。即ち私はその頃信じた物心一如の考へと對照して見て、どうも満足し得ない點、腑に落ちない點が往々あることに不滿を感じた。それ故、私はマルクスの考へに賛成することが出来なかつたのである。殊にその國體破壊の思想は、斷じて寛如することが出来ぬと信じた。

それと共に、當時の思想界に、新しい意味の儒教思想乃至老莊精神などを鼓吹したいと考へてオリエンタリズムを提唱したのである。それは、「新評論」の時代よりは反響も多かつた。が、段々、考へると、やはり日本精神主義を中樞とし、支那哲學は、寧ろその補助學の一部とすることの妥當な所以に想ひ到つた。爾來、私は日本精神主義の一本調子で推し進んで來たのである。

二、日本精神學の知識

日本精神主義が餘々、思想界の一角に擡頭したのは、昭和時代に入つてからのことである。そしてそれが勃興したのは、滿洲事變が起つて以來の事だ。即ち滿洲事變が日本精神を喚起する一

主因になつたことは、どうしても認めねばならぬ。その後、日本の國際聯盟脱退により、日本精神の烽火は、猛烈にあがつた。今や正に日本精神時代であることを考へると、大正三年及び九年の頃の事を回顧して、無限の感慨に打たれる。

ところで、日本精神時代となつても、「一體日本精神とは何か」と嚴正に問うて見ると、要領を得ない答へをする人々が少くない。もうそれが誰にも、わかつて居る筈のやうだが、日本精神について、確實な定義を求めると、意外にも、はつきりした解釋に接することが少い。以上の如き場合を、私は度々経験したのである。

それから或一部の人々は、「日本精神についての解釋を知ることにも必要だが、それが現代生活の各方面に、どう作用するかといふことが、はつきり分らぬ。此の點を聞かぬと、一向物足らない」といふ。いかにも、正當な要求だと思ふ。學者のうちには、日本精神だけを解釋することに全力を注ぎ、それが現代生活の革新に、どう働きかけるかといふことを説かぬものも少くない。その爲に、日本精神の徹底具體化を妨げてゐるやうな場合もある。

その他、日本精神に対する誤解、曲解などもあつて、日本精神時代であるに關らず、往々、いろいろの疑問を聞くことがある。それ故、「日本精神とは何ぞや」といふ點を明快に説く必要が

あらうと思ふが、多年の経験によると、何としても、日本精神についての基本となるべき知識の一斑を腦裡に收め、それから豫備知識をも大體、得て置くことが必要と考へる。

左様した知識なしに、すぐ「日本精神とは何ぞや」といふことを正確に知らうとするのは、美術の知識なしに、美術を鑑賞しようとするやうなもので、それは困難だ、勿論、美術は誰にもわかるにちがひないが、眞實にこれを鑑賞するには、やはり、美術についての基本知識や豫備知識が肝要だ。漫然、展覽會場へ出かけて見ても、それ文の知識がなくては、眞の味が分らう筈がない。それは、日本精神を知らうとする場合においても亦同様である。

それ故、日本精神を知らうとするには、その有力な文献を一應、涉獵する必要がある。無論、それは博通を要しない、また詳密を要しない。けれども大體に通じて置く文の必要はある。それから今一つ、「日本とは如何なる國か」といふことをも了解して置かねばならぬ。日本人である以上、自分の國を知らぬ筈がないわけだが、さて正確にその意味、特徴を自問、自答して見ると、存外に分明ならぬことがある。それ故、以上二方面について先づ注意を喚起して置くことを必要とする。

勿論、讀者諸氏は、最早、以上の二方面を十分、知つてをられやうかと思ふ。従てこれを説く

ことは、無用かも知れない。けれども講述の順序上、一應、右の點に觸れて置きたい。蓋し日本精神學は、現在、組織化され、體系化されつゝある最も新しい學問だ。これから發展し、完成されようとする途中にある新しい思想だ。それ故に、勢ひこれが基本となるべき知識についても、まだ十分に指示せられてをらぬやうな點もなしとしない。従つて、茲に過去に於ける有力な文献について、少しく語りたいたいと思ふ。

在來、明治に入つてから、政教社一派の人々により、日本國粹主義が唱へられ、また日本主義協會一派でも、これを説き、この方面の文献が多少ある。が、日本精神學なるものを打建てるどころ迄ゆかなかつた。無論、それらの説も参考とならう。然し乍ら、基本知識としては、何と云つても古典が一番宜しい。「日本書紀」「古事記」「祝詞」「萬葉集」などは、基本知識の重要要素である、これは大體、一應讀んだ人々が多いであらうが、念のために茲に擧げる。

それから北畠親房の「神皇正統記」、山鹿素行の「中朝事實」も亦、日本精神についての有力な著述として、必讀のものと思はれる。「正統記」は、日本國體を闡明し、中朝事實は純粹古代日本の精神を説明するについて懇切を極めてゐる。これを「日本書紀」「古事記」に對照して讀めば、一層趣味が深いであらう。

次に、日本近世思想史上に大きい足跡を残した、國學派及び水戸學派の代表的な著書は、當然一讀すべき價値を十分に有する。國學派は、日本精神文化の本質を明かにし、思想上、支那的、印度的なもの一切を排斥して、新しい日本學を作ること努めた。そのために、少しく中正の旨を失つたところがあるけれども、古代文學の味を人々に傳へ、且つ古代日本精神の眞價を發揚するについて、少からぬ貢獻をした。

更に水戸派は、日本精神學を創設するについて、支那の儒教に於ける理論を採り入れ巧みにこれを調和した。のみならず、日本精神を政治、經濟、教育などの方面に、如何に具體化すべきかを示した。また、「大日本史」により、大義名分の思想を堂々、發揮したところは、独自の光彩を放つたのである。それ故、以上二つの學派の代表著書を読むことは、日本精神を知るべき捷徑だと思ふ。それは左の如くである。

- (一) 賀茂眞淵著 「國意考」
- (二) 本居宣長著 「直毘靈」
- (三) 平田篤胤著 「古道大意」
- (四) 安積澹泊著 「大日本史論贊」

- (五) 三宅親淵著 「中興鑑言」
- (六) 栗山潜鋒著 「保建大記」
- (七) 藤田東湖著 「弘道館記述義」
- (八) 同 「常陸帯」
- (九) 會澤正志著 「新論」
- (十) 同 「下學通言」
- (十一) 藤田幽谷著 「勸農或問」

大體以上の如くであるが、そのほかに「大日本史」及び、頼山陽の「日本外史」「日本政記」などを讀む必要があらうと思ふ。また蒲生君平の「今書」、山縣大貳の「柳子新論」、淺見齋の「靖献遺言講義」、佐藤信淵の「混同秘策」「復古法概言」なども讀めば、一層、日本精神の本質に徹し、且つその具體化について、一段、暗示や示唆を得ることが可能であらう。

三、國學と水戸學

國學派の説くところは、眞淵・宣長・篤胤らを通じて、大體同様である。勿論、日本精神を基本として、國文學・國史などを論ずる方面になると、多少の相違がある。けれども、日本精神原理を説いた上では、概ね同一の趣旨にもとづき、大差がない。従つて、宣長の「直毘靈」だけ見ても、國學についての要領はわかる。

彼等が、「國學」の旗を翻した所以は、眞淵らの現はれた時代に、支那學が最も旺んで、すべての學者は、殆ど例外なく、支那崇拜に陥つた。従つて文學上、表現においても支那的であり、思想上、考へ方においても支那的だつたのみならず、當時の學者は、自國の文化を輕侮し、自國の學問を馬鹿にするといふ陋風があつた。それが、ともすると政治的にも、よい影響を來たさず、思想的に獨立を失はしめるといふ弊害が多かつたのである。

例へば、蕨生徂徠の如きは、學界の豪傑と云はれたが、「孔子贊」において、自ら東夷と賤稱し、支那の儒教の前に叩頭百拜するの愚を演じた。それに彼れの門下、太宰春台は「辨道書」において、「日本には古來、道德がなく、それは皆支那から教へられたのだ」といふことを斷言し、頭から日本の學問を輕侮した。徂徠が孔子を尊敬することはよいけれども、そのために自ら東夷といひ、日本を夷國視するが如き口吻を洩したことは、不見識だつた。それは、彼れが思想的獨

立を失つたことを明示する。そこに徂徠の徹底的支那崇拜心を反映してゐる。

それから春臺が「古來、日本に道徳がなかつた」といふことも、餘りに儒教を尊重したところから出た言葉で、日本文化史の知識なきことを暴露したと云はねばならない。古代日本には、道徳理論はなかつたかも知れないが、實行上、道徳の存在したことは、紀記の明記する所で、春臺がこの點を知らなかつたのは、餘りに迂濶だ。

國學一派は、左様した大學者の態度に大きい不満を起して、その愚蒙を斥けるために勇敢に戦つた。それ故、排支那學といふことについて、大分過激なところがある。即ち儒教の缺點を指摘する上に、ともすると、矯激に流れた點がある。が、當時にしては、實に止むを得なかつたことであらう。勿論眞淵・宣長・篤胤らは相當支那學に通じ、この方面の知識を十分に持つてゐたのだから、盲目的に攻撃したのではなく、可なり急所を衝いてゐる。

かうして彼等は、進んで古代日本理想主義を高調し、「古代日本に還れ！」と叫んだ。即ち古代日本こそ、理想的な時代で、人々は道徳の理論を知らなかつたけれども、無意識によく道徳の旨を實行したといふのである。そこには、支那思想や印度思想を混入しなかつた時の朗かな、明るい精神が満ちあふれてゐるとするのである。それと共に、彼等は日本國體の尊嚴を説き、日本精

神文化の優越を主張した。國學一派の考へは、大體以上の如くで、それらが「國意考」「直毘靈」「古道大意」などに説かれてゐる。

水戸學一派になると、國學派とは、大分趣を異にする。一體、世上、一概に水戸學派と云ふがその内容は、本來二つに分かれてゐる。一つは水戸史學であり、一つは水戸精神學だ。これを混同すると水戸學の精神を理解するのに不便な點を生ずる。

水戸史學は、徳川光圀(義公)の時代に、もうその基礎を据え、治保(文公)の時代に大成した。それから水戸精神學は齋昭(烈公)の時代に勃興し、且つ完成された。以上の二つの間には、大きい共通點のあることは、云ふ迄もないが、水戸學派の内容を知るには、かく二大別して置くことが便利で、分明り易い。

一體、水戸史學は、江戸幕府の勢力が旺んな時代に成立し、大體において、義公の時に出來上つた。ところが、水戸精神學は、非常時を背景として成立し、且つ大成した。即ちこの二つの間には時代の推移なるものがあつて、背景を異にする。それ故、水戸史學は、大義名分といふことを主眼とし、全力を擧げて、この事を明かにするに努力した。何となれば、當時は、まだ大楠公の誠忠についても知るものが少く、日本國體についても、正確な自覺を持つものが殆ど稀れだと

いつてよい時代だからだ。

義公が「大日本史」の三大特筆を自ら創意したのは、實に日本國民のすべてが第一に知らねばならぬ大義名分の觀念を、一般に普及しようとした爲だ。即ち(一)神功皇后を皇妃傳に列し、(二)大友皇子を天皇紀に入れ、(三)南朝を正統としたのは、當時において、非常な英斷だが、それは、義公が大義を尊ぶ精神の一大發露にほかならぬ。水戸史學の特色は、他にもあるが、その大きい特色は、右の點に存する。

ところが、水戸精神學になると、大義名分の精神を繼承してそれが尊皇攘夷となつて現はれ、進んで、日本精神の原理ともなるべき自然の大道乃至正氣なるものを説き、文武一致・忠孝一本・學問事業不岐などを説き、そこに、非常時に對する心持を明白に反映した。また排佛、排耶の精神を率直に大膽に表明し、國學一派が儒教の日本精神と共通點を有するのを認めないで、之を排することを非とした。今日、水戸精神學が、私らの頭に強い響きを與へるのは、それが非常時を背景としてゐる爲めではなからうか。

四、大日本史の三大特筆

前述、水戸の「大日本史」における三大特筆といふことは、もう誰も承知してをらるゝと信ずるが、序に言及して置きたい。今日、三大特筆といふことについては、大體において、異論がなくなつてゐる。が、水戸義公が、その創意により、大義名分の上から、(一)神功皇后を皇妃傳に列したこと、(二)大友皇子を天皇紀に入れたこと、(三)南朝を正統とし、北朝を閏位としたことは當時學者により、いろ／＼議せられた問題だつた。蓋し「大日本史」が作られはじめた時分は、足利高氏を忠臣とし、楠木正成を不忠の臣としたやうな思想がまだ有力だつたから、義公の如き立場から、史上の問題を公正に批判する風潮が容易に起らなかつた。左様したとき、義公は率先、彼れの勤皇精神に基づくところの新説を大膽に發表することを辭しなかつたのである。そこに思想家としての義公の優れた點がはつきり見える。

(第一)神功皇后のことは、「日本書紀」その他、「水鏡」「扶桑略記」「神皇正統記」などで、天皇と同列にして、傳記を書いてゐる。ところが、「古事記」になると、仲哀天皇の次ぎに應神天皇のことを謹記し、その間に神功皇后のことを挿入してをらぬ。且つ、「日本書紀」では、天皇と同列に皇后の傳記を入れてはゐるが、攝政元年と始めて記して、その意味を明かにしてゐる。のみならず、後の御謚號も皇后としてある以上、當然、天皇であらせられぬことは瞭然としてゐる。

かうした點について義公は考へ及んだので、皇后が攝政として爲されたことは、仲哀、應神二天皇の本紀中に謹叙し、新たに皇妃傳の中へ神功皇后を入れまゐらせた。それが「大日本史」の第一特筆である。

(第二) かの壬申の亂に非痛な最期を遂げさせ給ふた大友皇子のことは、從來、史家の間に問題となつてをり、「大日本史」でも、皇子のことをどう取扱ふかといふ點で、可なりに議論があつた。この場合、義公は、安積澹泊らの意見をも徴した上、大友皇子を天皇本紀の中に入れまゐらせることゝした。それは「懷風藻」に皇太子とならせられた旨を記してをり、且つ「立坊次第」と「水鏡」とに、大友皇子の即位を記してゐるからである。それに天智天皇の崩御から、天武天皇が即位せらるゝ迄、當然、萬機を親裁された御方がなくてはならない。左様だとすれば、いきほい大友皇子の即位を認めねばなるまい。事實上、かく見るのが至當である、それ故、義公は、皇子を天皇紀中に入れまゐらせた。それが後に公論となり、明治三年、朝廷から弘文天皇の諡號を上られたのである。これが「大日本史」の第二特筆と云はれる。

(第三) 南北正閏問題は、昔からいろいろに論ぜられ、一時、この議論がひどく紛糾したこともある。それは、中々むづかしい問題だつた。義公は、大義名分の考へから、南朝を正統と断じ

たのであるが、それを決定する前、参考として、水戸の史臣、三宅觀瀾、栗山潜鋒らの意見をも徴した。實は、「大日本史」論述の擧がある迄は、北朝を以て正當とし、足高利氏を忠臣視して、南朝は閏位にあるもの、楠木正成、新田義貞らは、逆賊だといふ風に解釋されてゐた。ところが、義公はそれを以て不當とし、南朝におかせられては、三種の神器を擁し給ふ以上、南朝が正統で北朝が閏位にあるべきだと断じた。この點義公の云ふ所には、尙ほ少しく行き届かぬところがなではない。が、天皇親政の時代を現出すべく、皇政復古を主眼とせられた後醍醐天皇が、たとへ、一時失意の御境地に立ち給ふたとしても、正當の天皇としてあらせられた以上、その思召を以て正當とし、その教旨により即位させられた天皇を以て正しいと認めねばならぬとする説が、黑板勝美博士らに依つて唱へられてゐる。即ち義公の言ひ足らぬ點をそれで補つたわけであつてやがて明治四十四年、明治天皇は御聖旨により、樞密顧問の諮詢を経て、茲に南朝を明白に正統とする事に決定なされたのである。その以前、帝國議會でやかましい問題となつたことも一切、右によつて解決された。従つて義公の精神は、茲に正しく認められたわけで、それが、「大日本史」の第三特筆である。要するに、その基づくところは、飽迄も大義名分を絶対に重んずるところの大精神の上にある。「大日本史」が、國史として最大の權威を有する所以も亦一つは其處にある。

茲に一言補足して置きたいことは、「大日本史」が後小松天皇の時代に筆を留めてゐることだ。それは元中元年、後龜山天皇が京都に還幸せられて、神器を後小松天皇に譲り給ひ、茲に南北朝の合一を見たからで、兩朝何れも神裔にまします以上、その間に輕重の差あるべきでなく、南北合一により、日本國體の本然に歸つた旨を表明したのであつた。

既に擧げて置いた安積澹泊の「大日史論贊」は、以上三大特筆の精神を評論の上で明かにするため、執筆したのである。澹泊は、頼山陽が心から敬服した歴史家の一人だ。山陽の「日本外史」「日本政記」などは、皆澹泊の「大日本史論贊」から、影響や感化を受けてゐる。現に山陽は、澹泊の論贊だけを集めて、「大日本史贊藪」と題を付け、澹泊の立派な見識と品位高い文章とを心から賞讃した。唯、その書き方が、むづかしいので、割合に世上に流布してをらぬが、山陽の文章にくらべると、堅苦しいところがあるにもせよ、堂々たるものだ。私が、「大日本贊藪」の一讀を勧めるわけは、其處にある。初版の「大日本史」には、右の論贊が付けてあつたが、後に至り、高橋担室（彰考館總裁）らの建議で、それを抜いてしまつたので、現行の「大日本史」には、澹泊の大手筆になつた論贊が入れてない。従つて、山陽の論じた「大日本史贊藪」を見なければならぬ。之は活字本で、いくらもある。

五、不朽の二大名著

それから水戸學派の中でも、義公時代に光彩を放つた三宅觀瀾の「中興鑑言」と栗山潜鋒の「保建大記」とは、是非一讀を要する有力な文献で、故乃木大將は、この二つを非常に愛讀されたのである。

觀瀾の「中興鑑言」は、建武中興のことを主題として、率直に彼れの意見を述べてゐる。彼れは、後醍醐天皇の御心づくしに滿腔の同情を捧げ、またその御英明に對して、讃仰の言葉を記してゐる。が、それと同時に何故、建武中興の聖業が失敗したかといふことをも、嚴肅な態度で直論してゐる。そこには、觀瀾の見當ちがひもあるけれども、日本帝王學の精神を闡明した點は、實に立派なものである。文章も亦華やかで、而も重味があつて第一流の大家たる風格を示した。それ故、一度繙くと、不知々々、讀了させる力が籠つてゐる。何といつても建武中興は、大化革新、明治維新と共に、史上の三大現象であるから、是非共これが真相を知るには、觀瀾の「中興鑑言」によるのを一番便利だとする。

それから潜鋒の「保建大記」は、皇道の不振を嘆いて、保元元年から、建久三年に至る迄、三十七年間の出来事を叙し且つ論じた本で、いかにして、政権が武門の手に移るに至つたかといふことを各方面から明かにしてゐる。日本は何處迄も、皇室中心主義であらねばならぬ。そして天皇御親政を以て、國民を御指導あらせねばならぬといふのが潜鋒の意見で、それを明白にするために、史上三十七年間の事件を挙げ君臣の邪正と賢否、政治の得失、是非を直筆してゐる。その議論の進め方、筆の鋭さにおいては、観瀾よりも一步立ち優つた立派な史論だ。それ故、この書も亦當然、日本精神の基本知識を得べき資料として、繕かねばならない。

次に藤田東湖の「弘道館記述義」と「常陸帯」とは、水戸精神の原理と、その原理を政治・經濟・教育などの上に具體化するには、どうするかといふことを明かにしてゐる。つまり、水戸精神のエッセンスを掴むには「弘道館記述義」によらねばならぬ。また理論のみでなく、その理論を現實の上に生かしてゆくには、どういふ風に進んでゆくかといふことが「常陸帯」で明白にされてゐる。

いかに日本精神を説くとも、それが現實の上にどう作用するかを明かにしないと、大衆を動かすわけにはゆかない。在來の國學では、後に至つて佐藤信淵らの具體的な改革のプランを見るや

うになつたが、眞淵・宣長・篤胤らは、主として學問の日本化と復古神道の擴張とに力を入れ、政治・經濟の方面には、餘り觸れなかつた。國學一派において、人々が物足らなく感ずるのは、主として右の一點にある。

ところが、水戸學派の人々は、一面に於て政治家であつたから、熱心に政治・經濟の改革といふ上に言及しなければやまぬ。従つて日本精神の本質を社會改造の上に生かし、或は政治・經濟改造の上に具現化させるには、どうしたら宜いかを示さねばやまない。そこに現代人の参考とすべきところがある。東湖の「弘道館記述義」と「常陸帯」とは、この意味で必讀を要する。

六、會澤正志と山鹿素行

東湖と同時代の人で、水戸學の權威とせられた正志の「新論」は、山鹿素行の「中朝事實」と共に、不朽の大文章で、前節では「中朝事實」には觸れなかつたが、この書も故乃木大將が平生、手から離さなかつた名著で、純粹日本精神の本質を、古代日本史上の事實により、明白にしようと努めてゐる。今日から見ると、史實の研究といふ上では、まだ行届かぬところが見えるけれど

も、素行の論旨は實に卓抜だ。素行が眞淵・宣長らに先立つて、「日本精神の本質を知れ！支那崇拜をやめよ！」と呼びかけた聲は、今尚ほ凛として私らの耳に響きわたるやうな気がする。それ故、素行の「中朝事實」は、一應目をとほさねばならぬ。最近私は平凡社から、「中朝事實講話」を公刊して置いた。

正志の「新論」は、明治維新前——幕末の國士志士らが必要懐中してゐた。「新論」を讀まぬものは、眞の國士志士でない時まで云はれた位だつた。この書は、日本精神を根本として、幕末の外交難・内政難をいかに解決すべきかを一々、事例をあげて教へ、且つ教育の根本問題にも觸れてゐる。その見識の高邁、文章の流麗、議論の明快なことにおいて、本書が徳富蘇峰氏により「明治維新を促したバイブルだ」と云はれたのも當然だと思ふ。

丁度、正志が「新論」を書いた頃は、幕末の非常時であり、今は昭和の非常時を眼の前に控へてゐる關係上、「新論」を讀むと、ひしひしと身に思ひ當る節が多い。またそれによつて啓發せられ教訓せられることも少くない。この意味で、「新論」は、日本精神の有力な文献だ。この書の講話も、先日私が執筆して、平凡社から刊行した。是非正志の高邁な、進歩的な意見に接せられたい。それから正志の「下學通言」は、日本精神を説くについて、儒教の理論を巧みに應用したもので、

神儒一致のもとに、日本精神を明かにした好著である。これは、何れかといふと、學究的にその理論を構成し、組織・體系も亦大體において能く整つてゐる。故に、「新論」と併讀せらるゝならば、一層、深く日本精神に徹することが出來よう。

それに藤田幽谷の「勸農或問」は、農本主義を高調した書で、深く日本の農民に同情をよせ、田園を愉快なものにし、農民の生活を楽しいものにするには、一體、どうしたら宜いかといふ點に深く觸れてゐる。幽谷は經綸あり、高き抱負ある國士で、學者としては、その子の東湖よりも一段上にゐた人であるから、議論も立派だ。論據も中々、しつかりしてゐる。故に農本主義による新しい經綸を知らうとするには、「勸農或問」の如き、最も適當の書である。

七、日本精神とは何ぞや

前節に擧げた日本精神に就ての参考書は先づこの位にして、他は説明を略する。そして以上擧げたものうちで、せめて二三冊でも讀んで戴くなら、日本精神講話を進める上に都合が宜い。茲で愈々本節に入らうとするに當つて、私は、日本精神の定義を示して置きたい。

日本精神とは、日本國體の尊嚴を正しく認識し、物心統一の原理に即して、中正・調和の旨に徹底する道だ。

以上は、私がいろ／＼考へぬいた結果、漸く把持するに至つた定義である。尤も一言のもとに「日本精神とは、大和魂だ」とか、或は「日本精神とは、隨神の道だ」とか、簡単に云へぬこともないが、現代人の一般には、少し分りかねよう。また「日本精神とは調和だ」とか、「日本精神とは清明心そのものだ」とかいふものもある。が、それ丈では、日本精神の一要素に觸れた丈で、全部に觸れてをらぬ。

また或學者中には、日本の國民性に附随するところの要素だけを擧げて、「それが日本精神の原理だ」といふものもある。が、國民性の諸要素は、日本精神を構成する上では大切だが、それが直ぐに日本精神ではない。それから日本趣味の各方面を説いて「これが日本精神だ」といふ人もある。けれども日本趣味なるものは、やはり、日本精神を組み立ててゆく一要素で、直ちにそれが日本精神の全部ではない。

こんな風に、日本精神を定義するについて、いろ／＼異つた言説が入り亂れてゐる。が、私は右に示したやうな定義が、比較的新しく、その要旨をつくしてゐるやうに思ふ。勿論、到らぬ

所があれば、是正を仰ぎたい。そして以下日本精神時代の來つた所以、それが思想史の上から必然の現象であることを説いてゆかう。

八、日本思想史上の二大現象

日本思想史を見ると、二つの大きい傾向、主流が必ず眼に著く。それは何か。(第一)外國中心に、また外國本位に思想が流れてゐる場合、(第二)日本中心に、日本本位に思想が動いてゐる場合の存することである。即ち以上二つの時代が交代に現はれてゐる。何故、かうした現象を見るかといふと、それは、日本が島國だといふことに基づく所が多い。島國である以上、四方から、新しい思想、新しい精神、新しい文化、新しい學説が、どしどし流れ込んでくることは避け難い。この場合、日本民族は、それらのものを受容し、或は歓迎し、頭から之を拒むやうなことが殆どなかつたと云つて宜からう。それは儒教・佛敎・キリスト敎に對する様子を見ても、すぐ分るであらう。即ち日本民族は、この三つの大きい説教を受容して、これを日本のものとする所迄に消化した。勿論、一時は佛敎に囚はれすぎたこともあり、儒敎に心酔したこともある。けれども

左様した弊害の上に目ざめると、必ず自分から之を矯正する。

如上、外國中心に思想が動く場合といふのは、佛敎に傾倒して、印度を崇拜したり、儒敎に共鳴しすぎて、無暗に支那を有難がつたりすることを意味する。或は儒敎から更に進んで、遂に漢文學に心酔し、何事も漢文化せねばやまないと云つたやうな傾向を生じた時代もある。かの平安朝時代では、その前半が支那崇拜に傾き、後半が、漸次それから離れて、日本文學の獨立を計るやうになつた。そして鎌倉時代に入ると、日本中心の思潮が一段の濃度を加へたのである。

蓋し平安時代の後半において、日本中心的な風潮を生じ、日本文學乃至日本思想の獨立を望むやうになつたのは、當時の支那(唐の時代)が内亂を生じたにつれ、日本留學生を支那に派遣することをやめた事によるところが多い。その建議者は、菅原道眞だと云はれてゐる。傳説によると、道眞は、和魂漢才といふことを唱へ、日本精神を土臺として、支那の知識を吸収すべき旨を高調したと云はれる。つまりそれは、當時漢魂漢才を目標けたものがあつたから、左様した極端な支那化を避けねばならぬことを注意し、和魂(日本魂)第一を提唱したのであらう。

かくして、國文を以て書いた文學が起つて、漢文・漢詩を壓倒する勢を示し、「源氏物語」「枕草紙」「伊勢物語」その他の傑作を生むと同時に短歌方面も非常に發展した。それは日本中心に、又

日本本位に思潮が動きかけた結果にほかならない。即ち外國中心に物事を考へる時代が行詰ると、次ぎには、日本中心の時代が來るのである。

九、歐米追隨を排して日本の自覺へ

更に、明治初年以來の日本思想史を見渡すと餘りに、歐米追隨の時代が長かつた。思想上、日本主義や國粹主義が叫ばれたこともあるが、大勢は滔々として、歐米追隨に傾き、無自覺的に、盲目的にそれが固定してしまつた。それから來た利益は、明治時代において相當に見られたが、大正に入ると、弊害の方が多くなり、漸く歐米追隨の非を悟るものが出來はじめた。そして「日本に還れ」といひ「日本精神に目ざめよ」といふ叫びが漸次、強くなつたのである。

勿論、六十年間に近くも歐米追隨の態度を持つるものが、容易に消滅しないのは、情ない次第だが(現在も、尙ほ昏々として、それから目覺めぬものがある)それは、寧ろインテリ階級に多く、大衆は最早、日本中心に物を考へるやうになつて來た。此處まで來るについては、歐洲大戰當時既に目ざめるべき筈だつたが、中々目ざめず突如滿洲事變と國際聯盟脱退事件とが起るに及

び、漸く目ざめたことは、餘りにも緩漫だが、無論、目ざめぬよりは遙かによい。

かうして、日本精神時代が、現實的に私らの眼の前に出現したのだ。長い〜歐米崇拜の迷夢を繰返した後、漸く精神上の朗かな夜明が来たのである。かういつたからとて、私は現在、將來にかけて、頭から歐米を排斥するのではない。唯歐洲大戰が、まさしくと其の文化頹廢を示し、その白人優越の迷信のために、かの國々の文化が行詰つた以上、そこから期待すべき物の少きは、當然の事である。過去に於けるヨオロッパの如き潑刺たる勢は、既に今後に見られないわけであるから、第一に茲に心せねばならぬのだ。今やヨオロッパは大動搖期・大苦悶期にある。

のみならず、アメリカは商業本位の國、乃至工業の優勢を特色とする國で、物質文明の發達はあるが、精神文化については多くを期待することが出来ない。故に日本は、否でも應でも、歐米追隨をすつかりやめねばならぬ状態に直面したのだ。且つロシアは、マルキシズム中毒による國政失敗を明かに示してゐるのだから、茲からも、別に學ぶべき何ものも無い。

それに今や歐米諸國は、悉く國家主義となり、曾て高唱したインターナショナルリズムを丸で忘れたかのやうになつてゐる。この際日本とても、國家主義の立場にならなければならぬのは、必然の勢である。既に國家主義に立脚する以上、しつかりと日本精神の上に兩脚を置かねばならぬ

ことも亦明白の理であらねばならぬ。

回顧すると、大正七年頃には、デモクラシー（民本主義）の思想が、アメリカの音頭取により、日本をも動かし、國體と相容れない思想が擡頭した。それにつれて、社會主義が起り、續いてマルキシズムの大暴風が、日本の思想界を引掻き廻して大混亂を生じたのである。のみならず、そこから國體を危くし、國體を冒瀆するが如き邪惡思想を濫生し、日本の最大危機を招いた事さへもある。かゝる邪惡思想を排撃して、國體を擁護し、國體を固めようと猛然擡頭したのが、日本精神主義だつた。若しこの日本精神主義が起らなかつたら、日本は、一體どうなつたらうか、追想するだに、肌粟を生ずるの思ひがある。

一〇、國民性に立脚した文化創造

元來、日本民族は、創造力の上に相當の才能を有するのだが、明治初年以來、餘りに歐米追隨を能事とし、それさへ繰返へせばよいと云ふので、その創造の才能を各方面へ發揮することを自分から鈍らせた。このために、學問といへば、すべてが、歐米輸入のもので、久しく日本の學問

はなかつた。勿論、餘々、日本の學問も出來たが、大正の末迄は、大體において歐米學問の模寫即ち日本の學問と云つた有様で、文化的に現代日本は、世界に誇るべき創造を何一つもしないで來た。

今日、日本は、世界五大國の一つとせられ、或は日英米の三大國として並稱せられ、重視せられるのだが、それは主として日本陸海軍が強いからだ。學問上では、やはり五大國の一つに加はる文の創造を爲してをらぬ。それ故、この點は、ヨオロッパの二流國に向つても、余り誇れない有様だ。が、日本はいつ迄もかゝる状態に安ずべきではない。世界の五大國の一つとしては、學問上、歐米に類なき新天地を開かねばならない。どうしても、歐米人の手の届かぬ方面に、日本獨特の學問と組織・體系とを作らねばならぬ。かくしてこそ、世界五大國の一つとして、眞に歐米を壓倒する偉觀を發揚することが出來よう。かうした事を實現するについても、日本精神の本質の上に目ざめ、之を把持し、之を自覺することが何よりも必要だ。

のみならず、現在内政上の行詰りも、外交上の行詰りも、本來は、歐米追隨から來てゐる。それがために、日本民族にふさはしい政治、日本國民に適した外交を打建てることが久しく出來なかつた。即ち日本独自の内政と外交とを創作してゆくところに、日本の大なる光があり、望みが

あるのだ。この意味から考へても、日本精神が勃興したのは、當然のことで、何れかといふと、少し遅い感じさへある位だ。

日本文化の創造へ！

日本文明の創作へ！

それが日本精神主義の目ざすところである。それは回顧的でなく、前進的だ。それは保守的でなく、進歩的だ。その前進、その進歩に資するがためには、一應、日本古典の再吟味・再認識を必要とするので、無論、それは過去に囚はれるための古典研究ではない。即ち固有の精神文化――大寶庫を再吟味して、日本精神の本質を發揮し、將來の創造に資し、來るべき文化の創作に寄與しようといふのである。

現在、モダニズム、リベラリズムに心酔するものは、かうした事を丸で頭から否定して、依然歐米追隨を有難がつてゐるが、それは、歐米文化の現勢、及びその本質をはつきり知らぬからである。眞にその現勢を知り、本質を知るなら、日本本來の姿に立還り、その独自の創造へ、その獨特の創作へ、足を向けるべきであらう。それに氣付かぬところに、モダニズム、リベラリズムの時代錯誤性がある。

これを一つの實例について云ふと、滿洲事變が起る直前迄、滿洲に於ける日本民族は、支那から烈しい壓迫を受け、その生命線を全部根こそぎにされようとしつゝあつた。この時、日本精神に燃えた軍隊が、奉天の北大營で自衛的行動を執り、支那の抑壓に向つて、手強く戦つた爲に、生命線を確保することが出来たのだ。日本民族が今日、旺んに滿洲に發展し得るのも、歸するところ日本精神の發動にある。

私は昨年八月親しく北大營の戦跡を訪ひ、土壁に残つてゐる多くの弾痕を見て、當時を偲ぶと共に、野の一隅に當時戦死した二人の兵士の墓が立派に建てられ、香華を供へ、果物を捧げてあつたのを目撃して、そこに生きた日本精神の發動を現實に知つた。私はちいつと、兵士の墓に向つて瞑想し恭しく拜禮して、夕日を浴びつゝ、友人と一緒に野に立ち、時の過ぎゆくのを忘れた。この際のことは、今尙ほ印象が強くて忘れることが出来ない。

要するに、リベラリズムの徒が何と云はうとも、モダニズムの輩が何と曲解しようとも、滿洲に於ける日本民族の生命線は、日本精神の發動によつて始めて確保せられたのである。この生命線が一時脅かされ、覆へされようとしたとき、日本精神の動き、日本精神の目ざめが急に起り、かくて日本民族を助けたことは、生きた實事が證明してゐる。それは單なる理窟や理論ではない。

かく考へるならば、日本精神の目ざめが、日本に幸ひしたのである。若し當時、歐米追隨の状態に出たとしたら、日本は滿洲に於ける生命線を失ひ、國の運命は、急に衰凋に向つたであらう。ところが、日本精神の目ざめにより、その生命線を支持してゆくところの基礎を固めることを得た。そして之に助けられて、日本の國勢は、更に新しく伸びてゆくのだ。日本の現在、將來をして、光あらしめ、希望あらしめる所以は、茲にある。

故に、政治も、經濟も、宗教も、教育も、文學も、美術も、一切、日本精神の本質に基いて、創造され、創作されるべきだ。即ち在來、歐米に見ざるところの優れた政治・經濟・宗教・教育・文學・美術などを新しく打建てねばならぬ。そこに新しい望みが湧き、新しい光がよみがへる。この意味においての日本精神主義は、現代人の主潮たるべきものと云はねばならない。故に日本精神の研究は、日本の生命を發展し、擴張し、その生氣を旺んにする唯一つの道だとしてよい。

一一、日本精神の基本原理

在來、日本精神についての理論は、餘り發達しなかつた。何となれば、それは主として實踐に

重きを置かれたからである。それに今日は兎も角、在來、日本民族は理論好きでなかつたから、日本精神を科學的に、或は哲學的に、理論の上から、周到に論述しようとする事について、關心を持たぬ者が多い有様だつた。

従つて、日本精神についての理論は、大正の末迄、餘り發達してをらぬ。それが少し宛進んだのは、昭和に入つてからの事だつた。従つて、日本精神の學的究明はより多く、今後に俟たねばならぬが、茲には、私の未熟な研究の一端を述べて、會員諸氏の高教を仰ぐ事とする。

既に私が定義したところにより、日本精神の要素を分解すると、

(第一) 日本國體の尊嚴を正しく認識する事、

(第二) 哲學上、物心統一の原理を認める事、

(第三) すべてに對して中正・調和の態度と心とを以てする事、

の三つになる。その他國民性の特徴、傳統的文化——殊に精神文化についても知らねばならぬが、先づこの三大要點から講述してゆかう。

一、天壤無窮

日本國體の尊嚴！

この事は、一應、何人も知るところであらうと思ふ。けれども順序上、先づこの點に觸れなければならぬ。蓋し、世界に國は多い。強國も亦相當にある。唯國體の上においては、日本に匹敵する丈の優越性を備へた國は、斷じてない。それは單なる御國自慢から力説するのではなく、權威ある文献、確乎たる事實によつて、かく云ふのである。

ところが、歐米追隨の思想——自由主義やモダニズムに傾いてゐるものは、頭から歐米流の考へを以て、何事も規定しよとするので、歐米の國體を解釋する頭で、日本の國體をも解しようとする。それは全く見當ちがひで、歐米流の法治國家と同一視するが如きは、眞に日本國體の本質を正しく理解する所以でない。

普通、日本國體の優越を説く人々のうちには、皇室が萬世一系であらせられるといふことを第一に説くものが多い。無論、それにちがひないが、萬世一系といへば、エチオピアといふ國も亦日本と同様である。のみならず、同國にも、太陽神話などもあるさうで、この點、頗る日本と似てゐる。が、同じく萬世一系でも、日本は、國體の本質上、エチオピアなどは、全く異なる多くの美點を持つてゐる。それは何か。道の國日本として、大義を四海に布く重要使命を有する點で

ある。

それについて、特に言及しなければならぬのは、天壤無窮の御神勅である。それにおいて、萬世一系の旨を明確に豫言せられてゐると同時に、神を祭る心を以て、政治を爲すべきことを明示せられてゐる。蓋し神を祭る心は、純真そのもの、至誠そのものだ。左様した心によつて行はれる政治は、最高のものであり、最美のものである。

葦原の千五百秋の瑞穂國は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就いて

治せ、行矣、寶祚の隆えまさんこと、まさに天壤とともに窮り無かるべし。

以上の神勅において、「治す」の二字は、深く味ひ考へねばならぬ重大意義を含んでゐる。「治す」は「おさむ」と訓するが、「おさむ」といふ場合は、亂れた世の中を取鎮めるといふことを意味する。ところが「しらす」となると、國民を教化し、統一して、正しい政治、清い政治、公明な政治を行ふことを意味する。即ち天照大御神におかせられて、天孫に對し、「しらす」の政治を爲すべきことを垂訓されたものと拜察する。それは唯法治的に國民を統御するといふやうな、西洋流の行き方とちがひ、人心に染み入り易い教化の力によつて、これを指導せられ、不知々々、全國民が天孫の徳風に化し、そこに美しく、正しい政治が行はるゝといふことを仰せられたのである。

かの祭政一致なる言葉は、能くこの旨を現はしてゐると思ふ。

一三、祭事即政治——マツリゴト

祭政一致といふことは、今日の政教一致と同様、神を祭ることが政治であり、政治とは神を祭ることだつた。政治を「マツリゴト」といふのはその爲である。蓋し祖先を尊敬し、天神地祇を崇まひ給ふたことは、神武天皇の御時以來、度々、御詔勅の上にその旨を表現せられてゐる。即ちかうした意味において、祖先を祭り、天の神、地の祇を祭つて、心の誠を捧げられた。そこに嚴肅な態度と眞摯な精神とが具體化せられる。そして古代においては、以上の如き祭事が、政治の主要部分を占めたのである。

故に政治を行ふについても亦、神を祭る心を以てせられた。その心は純真であり、公明である。故に政治も亦純真となり、公明とならざるを得ない。且つ國家の大事については、これを祖先の神々に奉告し、また天神地祇の垂示を仰がれるといふことが、神武天皇以來、皇室において、常實行せられたところである。そして兵器を神庫に藏し、出征する將軍は、必ず神の御前にその

旨を言上して、然る後征途につき、凱旋したときも亦神々にこれを奉告するといふわけで、敬神の點では、十分に徹底したのである。即ち神を祭る心を以て、國家の政務を處理し、軍事を支配し、何處迄も至公至平であることが、歴代天皇の御親政の上に現はれてゐる著しい傾向である。それは「大日本史」その他が、史實によつて、明確に証據立つる點である。

故に日本では、古代に祭政一致の精神を如實に具體化し、祭事即政治・政治即祭事であつた。平たくいへば、政治とは「マツリゴト」であり、神を祭る心のもとに行はれたのだ。恐らく、古今東西を通じて、政治の最高境地は、必ず茲にあると思ふ。それが日本國體の本質を構成するところの一要素であることを知るとき、この一事を以てしても、國體の尊嚴性を認めることが出来る。

のみならず、日本の建國は、他の寄合世帯の國と大に意義を異にする。この事は、神武天皇の御詔勅において、建國の三大綱——積慶(仁慈)、養正(正義護持と正義扶植)、重暉(睿智)——精神文化建設)を明示なされた點に最も鮮明に、最も輝やかしく現はれてゐる。

是の時、運鴻荒に屬し時、草昧に鍾れり。故に蒙にして以て正を養ひ、この西偏を治す養正。皇祖皇孝、乃ち神、乃ち聖慶を積み、暉を重ねて、多くの年所を歴たり。(積慶・重暉)

以上によると、天孫降臨以來、國民に向つて仁慈を垂れ給ひ、力を以て、正義を養ひ、且つ正義の心を一般人に植ゑ付けることに努められ、加ふるに、精神文化の建設に邁進された御趣旨がよく分る。即ち三大綱こそは、日本建國の精神で、この地上に道を布き、道をひろめ、一切を正義の光と平和の美によつて、包容されようとなされたことを想察するに十分である。

だから、日本は、道のために建てられた國である。それによつて日本を莊嚴にし、進んで世界を莊嚴にしようとするのである。嘗て神武天皇は、「八紘一字」といふことを仰せられたが、それは、全世界を平和な一家族の如くにしなさいといふ大御心の發露で、眞に偉大な平和の光明を示された御言葉である。即ち日本を平和の樂園となさると同時に、東西の區別なく、南北の隔てなく、世界の國々をも合せて、平和の樂園たらしめようといふ、有難い思召である。

右に述べたところ丈でも、優に日本國體の尊嚴を認識することが出来る。即ち日本は萬世一系の皇室を戴き、そのもとに「八紘一字」の理想を實現し、大義を四海に布くべき大使命を有する。道の國、道の日本として、一切の國際紛争を滅絶し、世界が一家の如く睦じくなるよう、著著、その天業を進めつゝある。そして皇室におかせられては、率先、この方面に最大の力を御注ぎになつて來た。かく日本は崇高な天職に輝く道義國家だ。これを法治萬能の西洋國家と同一視

するのは間違ひだ。當然、道徳倫理の主體として見なければならぬ。

これを思ふとき、私は、今更に日本國民の一員として生れたことを、何より光榮に感ずる。凡そ世界にいろいろの國はあるが、その國體の尊嚴な點で、日本に及ぶ國は一つもない。のみならず、日本國は、大義を四海に布くべき國として、事實上最もふさはしい資格を備へてゐるのだ。思ふに、誰も日本國とは何ぞ、日本は國家としてどんな長所、特徴を備へてゐるかを知らぬものがあるまい。が、正確にそれを知つてゐるかどうかを自問、自答するとき存外、自分の生れた國について、はつきりした知識を持たぬといふことを自ら發見するやうな場合がある。現に私の如きも、日本國そのものを十分に知つてゐるつもりでゐたのだが、さて改めて、「日本とはいかなる國ぞ」といふことについて解釋しようと思へ、さていろいろと頭を捻つて見ると、存外日本を知らぬのに自ら驚いた位だつた。

従つて茲に「日本とは、如何なる國ぞ」といふことについて、少しく語らねばならぬ。英雄僧日蓮は日本について「名のめでたきは扶桑（日本）第一」といひ、また「世界八萬の國に優れた國」ともいつた。更に北畠親房は「神皇正統記」において「大日本は神國なり。天祖はじめて基をひらき、日神ながく統を傳へ給ふ。我國のみ此事あり。異朝には、其たぐひなし」と云つた。

かうした點について、稍詳しく日本觀を述べたのは山鹿素行で、彼れは「中朝事實」のうちで、日本及び支那の二國を以て、世界に優れた國とし、進んで、日支を比較して、日本は、支那にも立優つた立派な國だとした。

本朝は、天の正道に中り、地の中國を得たり。南面の位を正しうして、北陰の險を背にす。上西下東、前に數州を擁して海を利し、後は絶嶺に據りて大洋に望み、每州悉く運漕の用あり故に、四海の廣きも、猶ほ一家の約なるが如し。萬國の化育、天地の正位を同じうして、竟に長城（支那萬里の長城）の勞なく、戎狄の膺つことなし。況んや鳥獸の美、林工の材、布縷の巧、金木の工、備らずといふことなきをや。（中朝事實）

素行のほかに、西川如見・會澤正志その他日本についてこの特徴・美點を語つた人々は少くない。藤田東湖の「弘道館記述義」及び「正氣歌」にも、日本のことを美しい言葉、力ある言葉で咏嘆してゐる。今それらを一々、擧げてゐると長くなるから、茲にその主點を要約すると、左の如き結論に到達する。

（第一） 日本の國體が優秀無二なこと。

（第二） 氣候・風土共に中を得てゐること。

- (第三) 海の幸・山の幸に富むこと。
 - (第四) 容易に他國に攻め落されぬこと。
 - (第五) 國民性の優秀なこと。
 - (第六) 風光の明麗なこと。
 - (第七) 海外文化の長所を攝取すること。
 - (第八) 武勇上、傑出せること。
 - (第九) 正義及び平和を尊重すること。
 - (第十) 藝術に秀でてゐること。
- 以上は、日本の美點のみで、缺點・短所には觸れておらぬ。この點については、「日本風景論」の著者、志賀矧川は、日本を島國として考察した上から、(一) 度量狭小なこと、(二) 規模の小さいことを國民性の缺陷として數へてゐる。

一四、義は君臣、情は父子

唯茲に特に注意して置きたいことは、雄略天皇が仰せられた如く、日本において、皇室と國民との關係が、「義においては君臣、情においては父子」といふことである。一體、君臣の大義は、既に天照大御神の勅語においても、明白に之を規定なされ、儼乎として動かすべからざる所がある。けれども情の上からすれば、皇室は、國民に對して、父母の如き仁慈を以てせられ、國民は赤子の如きもの、乃至大御寶として、何處迄も、これを受撫せられた。この事は歴代の御詔勅の上に度々、拜見するところである。

○ 朕父母たり、何ぞ憐愍せざらんや。(聖武天皇)

○ 朕民の父母となり、撫育術に乖り、靜に此を言ひ、還りて懷に慙づ。(桓武天皇)

○ 夫れ四海の内、孰れか朕の赤子にあらざる。(明治天皇)

だから父母として、國民に仁政を施され、天災地變などがあつたり、人民が困窮したりすると或は金品を惠み、或は官稻を貸し與へ、或は課税をゆるし、或は課役を緩うされ、時には、プロレタリアを救ふために、傲れる富者や豪族らを抑へ付けられたことも往々ある。のみならず、國民の窮苦を憐み給うて、これに至深の同情を注ぎ、服御を節し、常膳を減せられた場合も少くない。以上の事は、天皇御親政時代に、度々、詔勅の上に現はれてをり、いかに深く國民を受撫せられ

たかゞ明白にわかる。

かく皇室と國民との關係が密接なことは、世界に類を見ない。それに古來、日本國民は、皇室から分派したもので、藤原氏・源氏・平氏その他、皇族から出て、それからいろいろに分れ、藤原氏から、伊藤・藤井・藤田・藤山・藤倉・藤本などに分岐したといふ具合で、國民の祖先に遡つて考へると、皇族から分派したものが多し。即ち日本は、民族的に一家族の如き關係を保持し、その總本家が、畏くも、皇室であらせられることを思ふとき、深い光榮を感じずにはをられない。それ故に、日本國民の一致團結力が強く、勤皇精神が旺なものである。即ち雄略天皇が、「義においては君臣、情においては父子」と仰せられたことが、具體化せられ動かすべからざる基礎を固めてゐる事がわかる。

右に述べたところにより、「日本とは如何なる國ぞ」といふ要點に簡略乍ら、觸れ得たと考へる。これをヨオロッパ方面と比較すると、大分、異つたところが多い。ヨオロッパは、大體において、その地位・風土・環境などの上で、日本の如く恵まれてをらぬ。且つ古來、民族の大移動があつて、鬭争が烈しく、また人種の數が種々雜多で、關係が中々こみ入つてゐる。のみならず、君臣の關係は、唯法律的に規定せられ、その間に情味を有する國が少い。

加ふるに西洋では、その建國精神も明白でない國の方が多く、寄合世帯なのだから、力と力との争ひが、始終、現實を支配し、君主は力を以て、人民を抑へ、人民は力を以て、君主に對抗すると云つたやうな具合だ。従つてその關係は親密でない。無論、例外もあるけれども、日本とは餘程、趣を異にする。だから、ヨオロッパの有識者は、日本の國體を理想的なものとして、之を羨望してやまない。彼等は、日本の如き君臣關係、日本の如き有機的國家結合こそ、最も望ましく、最も美しいものだとして讚仰してゐる。然るに、西洋かぶれした徒が、この國體の尊嚴性を輕視するとは、不心得の至りではないか。

一五、唯物哲學に對する疑問

在來、日本精神について、その理論的な方面は、大分閑却せられてゐたが、現代の如く理智の發達した時代には、どうしても、理論上の基礎付けが必要である。或は科學の上から、或は哲學の點から、日本精神の基礎を打建てる事に力を注がねばならない。

私は現在哲學原理によつて、日本精神の根據を形造る方針を執つてゐる。哲學といへば、若き

人々の間において、往々西洋哲學を意味するが如く、思ふものもある。が、東洋にも立派な哲學があることは、今更申す迄もない。印度にも、支那にも、日本にも、西洋に對して劣らぬ哲學がある。唯ひとしく哲學でも、西洋のものは、唯物に傾くか、唯心的に偏るか、その何れか多く、殊に近代西洋哲學は、唯物本位である。

それは、西洋の科學中心の文明が、おのづから齎したのであつて、宇宙や人生や人間などを、一切唯物化して見るといつた傾向が最も強い。嘗て私は唯物主義の哲學が、近代西洋で旺んじた事情に言及し、十六・七世紀に跨つて、ヨオロッパを風靡した重商主義、及び十九世紀にかけて行はれた諸種の機械發明が、主因を爲すことを述べた。

ヨオロッパでは、十六・七世紀の間において、近代國家の形態が略ぼ成立し、プロシヤ、ロシヤなどの勃興を見た。その中央集權主義に伴ふ政費膨脹は、勢ひ巨額の金を要したので、どの國家も、どの政府も、金銀貨吸收に最大の努力を爲した。かうして重商主義が自らヨオロッパを風靡し、いづれも國富増進を一番に目がけたのである。それはよい事にちがひなかつたが、次第に極端に流るゝに及び、弊害も亦少くなかつた。即ち重商主義に伴ふ人間の黄金化、社會の黄金化を生じた。従つて、不知々々の間に唯物思想を培ひ、唯物精神を高調するに至り、人間よりも却つ

て貨幣を重く見るやうな傾きさへも生じた。

それから機械の發明は、本來、人類の幸福増進のためではあつたが、それが旺んになるに及び、一切を機械化して見るやうな情勢を生じた。いひ換えると、人間よりも、機械を大切にすることが弊害を生んだ。以上の如き有様が、唯物哲學を發達せしめる原因となつたのである。蓋し十九世紀に於ける唯物哲學の先驅をしたのは、イギリスのトオマス・オップス（西紀一五八八——一六七九）である。彼は、「すべての存在は物體であつて、すべての出來事は運動だ」と云つた。

それに次いで出たフランスの、ラメトリー、ダラムベエル、デイドロオ、ドルバツクなども、極端な唯物主義者だつた。そしてマルクスと同年代のモレシヨット（一八二二——一八九三）の如きは、極端な唯物精神を高調して、「生命は無機物的物質から有機物に、更らに有機物から無機物に移るところの永久循環で、人間の思惟は、腦物質の運動に過ぎぬ」と云つてゐる。またビュヒネル（一八二四——一八八三）は、「世界の秩序を保つてゆく原動力は、神ではなく物質だ。生命なるものは自發的に生じた物質の結合で、精神活動とは、外來の刺戟によつて、腦の灰白質の上で起された運動だ」と解釋してゐる。即ち人間の靈性も神祕の力も、一切、物質だとして、人間

を一箇の機械の如く見なして、思惟も、冥想もすつかり一種の反射作用に過ぎぬとする。かく簡單に片付けて了ふことが出来るか、どうか、頗る疑問としなければならぬ。

一六、物心を統一する大生命力——日本精神哲學原理

以上、唯物哲學が餘りに物的に偏してゐるのに對して、又餘りに心的に偏してゐるのは唯心哲學だ。「萬法唯一心」とか、「現象即精神」とかいふ風に、一切を主觀的に眺め、客觀的な方面をすつかり遺失して了つてゐる。それは、唯物哲學にくらべると、深味があるけれども、矢張妥當を欠くところがある。

卒直にいへば、人間は物からのみ出來たのではなく、他面、心的作用がある。また人間は心からのみ出來たのではなく、一方、物的要素を抱有する。即ち公平に見れば、物心二面に跨つてゐる。物的な作用と心的な作用とが、からみ合ひ、もつれ合ひ、協調して、そこに人間の活動や云爲を生ずる。

それと共に、心的方面と物的方面とを、統一してゆく力の存在を豫想しないでをられぬ。心と

物とが人間の一身上で、互ひに協同作用を營むに當り、それが何らの統制なしに爲されやうと思はれない。そんなら、以上の二つを統一する力は何か。私は天人を一貫する一種の大生命力だと思ふ。

蓋しこの宇宙、この天地は生命力の一大發現だと見ざるを得ない。それは、物質及び精神を統一し、この天地、この宇宙、この人生、この人間を創造し、支持するところの根本である。つまり、大生命力の生々活動によつて、一切が作出されたのである。それは無限に展開し、永久に亡びずに進んでゆく。それは物質を支配するが物質に偏しない。それは精神を支配するが、精神に偏しない。この二つを統御して、向上の一路を辿らしめる。それによつて、すべてが、秩序を保ち、調和を保つことが出来る。即ち私らの見る宇宙や天地や人生は、當然秩序正しきもの、調和の姿をいつも抱持するものと云はねばならぬ。この秩序、この調和の根本を爲すものは、一大生命力である。

かうした一大生命力は、暖かく萬物をはぐくみ、廣大な恵みを公平に、すべての物に頒つ。かの天體の運行が宜しきを得ると同時に、風雨霜雪、寒暑よく整うて、生活の資源を豊かにし得るのは、大生命力の支持による。そしてその本體、中樞を爲すものは、一つの大きな「まごころ」だと云つ宜からう。即ち大生命力は、物心兩面を統一し、整正してゆく「まごころ」の象徴だ。

すべての人間は、右の如き大生命力から分派したもので、それは、小生命力を具有する。故に人間は、本来、物質・精神の二方面を、統一してゆくべき本能性を備へてゐるのが當然で、物質に傾いたり、精神に偏つたりすべき筈がない。若しありとすればそれは、常態でなくて變態である。また人間が、大生命力の縮寫である以上、最初から「まごころ」を各自が具有すべきであつて、萬一、それが發動を見ないとすれば、一時、私心のために、それが曇り、或は鈍つてゐるのだと解しなければならぬ。

かく述べ來ると、マルクス主義者が、人間を唯物視し、機械視するのは、當を得てをらぬことが分る。勿論、經濟生活といふことは、輕視すべきではない。人間は友愛を元として、經濟生活を支持し、一人でも生活に苦しむものを生ぜしめないよう、相愛互助のもとに進まねばならぬ。が、經濟生活を最高位に置いたり、或は之を人間生活の全部だとすることは妥當ではない。

それに、ビュヒネル、モレシヨットなどの如く、人間をも物質の團塊だとすることも亦當を失してゐる。人間はこの大宇宙の前において、極めて小さい存在であるかも知れぬ。けれども大生命力の分派として、縮寫として、時に意外の靈力を發揮し、また物質以上の神祕的な作用や本能を示すことがある。左様した現象を見る以上、唯人間は物質の團塊だとして、簡単に片付けて了

ふのは、余りに皮相に墮した見方であり、上すべりした解釋だと云はねばならぬ。人間はもつと複雑だ、靈的だ、神祕だといふことを、唯物哲學者は自覺しなければならぬ。

一七、忠孝についての現代的解釋

以上、日本精神の立場から見た宇宙の根本生命について語り、人間が大生命力の縮寫であることとを述べた。それが日本精神觀上の哲學である。勿論、その説明については、尙ほ不備なところはあらう。餘りに大まかな點もあらう。けれども、解釋の上においては、これが一番、妥當だと信ずる。

既に大生命力の存在を推想し、豫定し、それが必然であることを認めた以上、人間生活が大生命力の原理を土臺として、「まごころ」を基本とし、中正の旨、調和の姿を保つことにより、正しい進展を爲すべきことを考へざるを得ない。また大生命力が創造を旨とする以上、人間生活においても、創造を旨とせざるを得ない。但しこの場合、日本國民としては、その傳統性に即してゆくことが約束されてゐる。

更に平たく云ふと、日本精神の哲學原理により、そこから發動して來る作用、そこから發現してくる要素は、(第一)まごころの必然的存在、(第二)中正の旨、調和の姿を重んじて之を實現すること、(第三)國民性にもとづいた創造機能の發揮である。誰もが知る如く、日本道德の特色は、忠孝にある。それは、人間の「まごころ」の發現として、全人類に行はれるべき主要徳目であり、最高倫理である。即ち人間が、その君主に向つて、「まごころ」を表示するとき、それが「忠」となり、兩親に對して、「まごころ」を發動するとき、それが「孝」となる。要するに、忠孝の源は「まごころ」である。それは日本精神の哲學原理に照らすと、自然で素直な發現であり、當然湧きあがつてくる正しい姿である。美しい様相である。

世上、一部の青年男女のうちには、忠孝を以て、非常に古い道德であり、形式的に固定した無生命のものだと誤解してゐるものもある。けれどもそれは、眞理の本質を知らぬからだ。また日本の國體を自覺せぬからだ。一體、古今東西を通じて不滅であり、不變であるところの眞理は、そんなに時代によつて、ぐらついたり、變つたりすべきものではない。少くとも、根本的な眞理は、一定不動であらねばならぬ。かの太陽は、神話時代から、この世界を照らしてゐるが、それは、大故にして大新である。一番古いといふ上からは、太陽の如く古いものはない。けれども毎

朝、東天にさしのぼる太陽は、いつも清新で、すが／＼しい。

眞理は、太陽の如きものだ。忠孝は、人間生活の上において根本的な眞理である。故にそれは、古いといふ上から一番古い、新しいといふ上からも亦、一番新しい。何となれば、古代人の生活において、それが根本的な生活の源泉であつた如く、今日においても亦根本的な生活の源であるからだ。かうした事を知らないで、「忠孝は古い、時代錯誤だ」といふのは、生きた現實を知らぬ者の妄語に過ぎぬ。既に述べた如く、人間の「まごころ」が君主に對して發動したとき、「忠」となり、兩親に向つて表示されたとき「孝」となる。即ち忠孝の二字は、多年の標語として、そこに新味を持たぬが故に、古いと思ふのは誤りだ。かゝる末梢的な考へ方により、忠孝の尊い意義を無視しようとするが如きは、眞理の本質を知らぬものと云はねばならぬ。

勿論、忠孝の根本性質は、時代によつて、少しも變らぬにもせよ、その表現せられたる形の上では、時代の動きにつれて、幾分の相違を來すことは免れない。戦時においては、楠公の如く振舞ふのが即ち大忠であるが、平時においてはその職分を、各自が正しく全うすることが大忠だ。即ち各自の職業に全心を傾注して、それにより國家に奉仕し、父母に安心を與へるのが忠孝だ。忠孝といふことは、何もむづかしいことではない。誰もが平時に直ぐ實行し得る常道である。

日本では、古來、忠孝一致の旨を重んじ、且つそれを實行して來たが、支那では、古來、孝本主義を高調し、實踐してゐる。支那に「孝經」「忠經」といふ本があるが、そこには、忠を孝の下位に置くべきことを説いてゐる。即ち孝第一、忠第二である。孝行は必然的なもの、一番大切なものとされてゐるが、忠道は、左程、大切なものと思つてをらぬ。故に忠孝一致ではない。

殊に日本では、忠第一、孝第二で、何よりも忠を重要なものとする。「大義、親を滅す」といふのは、日本の忠道だ。即ち君主に奉仕するためには、國體上、全力を之に捧げ、父母のことは、後廻しとする。場合によつて、父母の意見に背くことがあらうとも、大義に背くことは斷じて出來ない。大昔から一君萬民のもとに、皇室の大恩に浴した日本國民は、忠道を第一としなければならぬ。この事は、前述した日本國體の意義に味到するとき、誰もが之を必然の信條とするであらう。否、信條としなければならぬ。

ところが、支那では、忠道を輕視するものが多い。勿論、古來忠臣が全くなかつたとは云へぬが、極く少い。それは支那が易世革命の國で、王朝が始終變るからでもある。のみならず、支那歴代の君主は、口先だけ立派だが、力を以て人民を壓迫し、搾取する丈で、日本の天皇が事實上、常に國民の父母として君臨せられ、仁慈の旨を實現せられると云ふやうな美風が支那に於ては極

めて乏しい。故に支那では、人民も亦力を以て、國王に對抗するといふ具合で、暴政がひどくなると、國王を斥けるといふが如きことをも、支那國民は平氣で實行する。故に忠道の振はぬのは當然である。

唯家族主義のみが、支那で固く維持されてゐる事情により、孝道だけは、意外に長く存続してゐる。これとても現在では、餘程、形式化したものとなつてゐるけれども、兎も角、孝道の餘脈だけはあつた。即ちそれは、孝のみに偏して、忠を無視し、輕視して、何ら反省するところがない。従つて日本の忠孝一致の旨は、支那で見ることが出來ぬ。

それが西洋になると、一層甚だしい。西洋人には、忠孝の精神が頭から無い。彼等は、何れも絶対個人主義者だ。即ち國家は各個人の利益のために存在するものと爲してゐる。君主も亦、個人の利益擁護のために存在する機關だと見てゐる。かゝる考への下に、忠道は發展しない。故に彼等が戦争に出かけるときは、「家庭を護るために戦ふのだ」と云つてゐる。

更に個人主義の立場から、父母その他の關係も、利益本位であり、自利本位である。従つて金錢關係の上では、丸で他人の如くであつて、そこに何の情味もない。富める父が貧しい息子を冷眼視し、成金化した若者が、その老父母の窮乏を無視するが如き事例は、始終見るところである。

かゝる空氣の中には、孝道の行はれよう筈がない。

一八、中正の態度と調和美

前述した如く、人間の根本道徳たる忠孝の上において、一方に偏つた考へをせず、また忠道に
はげむと同時に、孝道にはげむのは日本のみである。そこに中正の態度が現はれ、調和の姿が見
える。かの日本精神史上に重要な地位を占める水戸學の如きも、「弘道館記」において文武の調和、
事業と學問との一致とを必要とし、神道の理論的方面の到らぬところを、儒教の理論を以て補ひ、
神儒の調和を示した。

文武の調和といふことは、中々、むづかしい。支那においては、古來、文を尊び、武を卑しむ
の風があつて、文——政治に従事するのを高尚とし、武——軍事に身を委ねるのを恥づるが如き
風がある。また科學、工藝の如き方面も、高級人物の従事すべきものでないと云つたやうな考へ
が久しく行はれてゐた。

支那の軍隊が弱いのは、既述したやうに、祖國愛の精神に乏しいためでもあるが、一は昔から
武を卑しむの風があるために、どうしても振はぬのである。従つて支那では、尙文主義に傾いて
中正の旨、調和の趣を示さない。ところが、日本では、古來、尙武主義に立脚し、早くから久米、
大伴兩氏の如く、勇武を以て知られた一族があり、支那のやうに軍隊を賤劣視するの陋風は絶對
になかつたのである。

のみならず、武人として知られた大伴家持の如きは、文字の嗜みが深く、「海ゆかばみづく屍、
山ゆかば草むす屍、大君の邊にこそ死なめ、願みはせじ」と忠義の精神を詠んだ。かうした文學
の趣味は、日本の武人に大小となく、共通したところがある。また、たとひ文學の嗜みなくとも、
優しい心持を有するものが少くない。唯武にのみ偏るものは極めて少い。即ちそれは文武一致で
あり、文武調和である。

要するに、日本では、偏武思想や偏文思想は、大體において是認せられない。茲に支那と日本
との相違がある。それに事業と學問の一致といふことは、今日、分化した學問時代においては、
水戸學の云ふ如く、肯定せらるべきかどうか。一概に、何ともいへぬけれども、昔の學問は大に
しては、治國平天下、小にしては修身齊家を眼目としたのだから、その學ぶところは、やかて實
踐するところだつたと見てよい。即ち學問と事業とは、離ればなれにならないで、互ひに握手し

た。

この事は、今日、學問の一半には、適用し得べき原則と見て差支えあるまい。要するに日本では、中正を旨とし、調和を重ずる上から、學問と事業とは、手を分つべきものとのみ見ない。一致すべきは一致し、調和すべきは調和する。そこに矛盾や背離はないのである。

一九、日本特有の文化的能力

以上の如き傾向について、アメリカの少壯哲學者メエソンの如きは、深く日本を讃嘆してゐる。メエソン氏は、イタリアの美學者クロオチエ氏に共鳴し、フランスの哲學者ベルグソンに推服してをり、その哲學上の見解は、一種の生命主義に通ずるところがある。

氏は、自我完成——各個人の心的完成において、三個の要素の調和し融合せんことを希求した。三個の要素とは何か。審美的、功利的、精神的な傾向である。メエソン氏の見解によると、印度は佛教國として、精神的要素に長じ、支那は藝術の國として、審美的要素に長じ、更に歐米は科學の國として、功利的要素に長じてゐる。この三要素を一つに調和し、融合したところに、自

我の完成がある。それは個人において然るが如く、國家においても亦同様だ。

ところが、以上の三要素は、當然調和すべくして、容易に調和せられない。歐米は功利的方面に長ずると同時に、審美的、精神的方面において、東洋に學ぼうとしない。のみならず、以上の三要素は、相剋するもので、調和すべきものでないといふことを獨斷してゐる。それがために、歐米は、功利方面にすば抜けてゐるに關らず、以上三要素の調和を無視する姿を示した。

そんなら、印度はどうか。印度は精神的要素の上に古來すば抜けてゐるがために、他から學ぼうとしない。審美的方面においても、功利的方面においても、外國の長所を採取しようとする努力に缺けてゐる。印度がイギリスのために亡ぼされ、今日尙ほその束縛から脱し切れぬのは、左様した偏見に原因するところがあると思ふ。

それから支那は、審美的要素の上に拔群の功績特長を示してゐるので、これ又他國の前に會釋して、功利的、精神的、要素の精粹を採り入れようとはしない。殊に支那は、自ら中華——世界第一の文明國を以て自任し、容易に他に學ぼうとせぬので、そこに偏つた傾向から離れない。かういふ風に見ると、歐米も、印度も、支那も、それぞれすばらしい特長を文明、文化の上に持つてゐるけれども、功利、審美、精神の三要素を調和した姿態美を具現してをらぬ。そこにメ

エソン氏の不満がある。

ところが、日本國は、功利的にも、第一位ではなく、精神的にも、すばぬけてをらぬのみならず、審美的方面においても亦、驚異を創造してゐるといつたやうな地點迄、達してをらぬ。けれども以上の三要素に對し、中正の態度を持って、その調和、融合を實現する上では、見事に成功してゐる。メエソン氏はかく断定するのである。かうしたことは、歐米の人々の間に現實視せられず、寧ろ夢想視せられる。萬一、右の三要素を一致せしめたとすれば、これを奇蹟視しよう。けれども日本が、この點で成功してゐるについて、何人も正當の認識を爲さぬわけにはゆかない。

ところが、この點においてメエソン氏の如く、素直に日本精神に見るところの中正の姿、調和の美を肯定しようとするものが歐米には少い。例へば、過去において、日本海軍は比較的艦戰、戰艦の上に工夫することを閉却した爲め、嘗て明治以前——豐太開時代に朝鮮、支那と戦つても海軍だけは、屢々、敗北の苦杯を嘗めさせられた。そして明治初年に於ける日本海軍は、今から考へると、氣恥かしい位、貧弱だつた。

それ故、日清、日露の戰役においても、歐米の諸強は、日本海軍の必敗を豫期した如くだつたが、過去に於ける不振、微弱の有様から全く絶縁して、日本海軍は、すばらしい優勢を示した。

この事が不可解だといふので、「謎の國日本」といふ名稱さへ出來た。が、これは歐米で、十分に日本の本質を研究し、認識しなかつたからだ。

日本は鎖國時代に、一應、その文化を完成して、十分に能力、精力を養つたから、歐米の功利文明を消化し得ぬ筈はない。この事は海軍においても亦同様で、日本では、歐米の文化を咀嚼すると同時に、その功利的な長所を日本に取つて、活用しようとして努力した。左様した機能が敏活に、旺んに働いた爲め、功利文明を克服して、日本海軍の飛躍を招來したのである。

故に日本は一方に偏せず、あらゆる長所、あらゆる美所を他から採つて、それを綜合し、融化する作用を一日も、一時間もゆるめない。だから審美、功利、精神の三要素を一つにすることが出來たのだ。かうした事は、日本にのみ見られるところで、歐米及び支那などには、殆ど見られない。

かうして日本は、独自の立場を世界に確保してゐるが、それにより、日本精神の徹底をどの邊迄、具體化し得ようか。一應やつて見なければ、分らぬ。けれども左様した中正の態度、調和の作用が、明白に日本精神の要素を爲してゐること又は、はつきり斷言出來る。

それに日本國民は、何れも創造機能を持つてゐる。人によると、日本國民は、猿真似主義で、

過去においては、印度や支那を模し、現在では、歐米を模してゐる。即ち他の働きを自分の方へ利用する丈で、自ら創造し、自ら発見することがない。故に日本國民には、恐らく、創造機能が乏しいと断定するものもゐる。

けれどもそれは誤りだ。日本文化は、必ずしも、印度や支那の模寫そのものでない。成程、日本は過去において、印度産出の佛教に心酔したことがある。支那特製の儒教に傾倒したこともある。それがため、一時弊害續出したのは事實だ。が、一度左様したことから目ざめると、今度は批判的に佛教や儒教を眺めて、これを日本化しなければやまぬ機能を旺んに働かす。その結果、非日本的な要素をすつかり清算して、日本の佛教、日本の儒教を創作する。それは單なる猿真似主義の結果だと云へない。そこに日本民族の創造的な機能が敏活に作用するのを認めぬわけにゆかぬ。

110、日本精神を基本とした新教育

以上の如く、説いてくると、日本精神とは何ぞやといふ問題に略ぼ解答を與へ得たと思ふ。次

ぎに來るのは、日本精神の具體化といふ一點だ。日本精神主義は、抽象理論を繰返してゐる丈で満足してはをらぬ。それが現實の上いかに作用するかを、ぢつと見守つてゐる。

例へば、日本精神主義に立脚する場合、いかに教育を改新するかといふことを語るのも亦一つの具體的表現だ。左様した觀點からすると、現在の教育は種々革新を斷行しなければならぬ諸點を含んでゐると考へる。日本精神主義の立場からすると、學生指導上、道徳乃至人格を第一位とし、知識を第二位に置く。ところが、歐米主義の教育は、大體において左様でなく、知識第一、道徳第二で、知識萬能を高調する。そこにいろいろの弊害を醸し出すのだ。

勿論、知識の價値も尊い。けれども人間生活の上で、何が一番必要かといへば、先づ人格である。人格者が存在することが多ければ多いほど、人間生活は圓滿となり、明朗となる。それ故にかに豊富、斬新な知識を有しようとも、それを宜い方面に働かして、悪い方面に用ゐない。かくして、一切の文化は健全な調子を帯びて、停滞しない。ところが、若し知識第一主義の教育を施し、知識萬能を高調すると、人間は知識に慢心し、中毒して、ともすると、それを悪い方面に用ゐる。今日、いろいろの疑獄が、各方面に起つてゐるのを見ると、概ね知識第一主義に中毒した結果から來たものが多い。つまり、左様した教育が、人々を深く誤つてゐるのだ。かくして尊重

すべき知識も、悪の方面に用ゐられて、有毒化し、やがては社會の調和と秩序とを破壊する。故にどうしても、道德第一主義のもとに、立派な人格者を作りあげて教育の主眼としなければならぬ。が、今日の或る方面に於ける小學教育などを見ると、知識萬能で押し通さうとする傾向がありはしまいか。知識の注入も結構であるけれども、萬能あつて一心足らぬ結果を招來するやうでは、いけない。先づ道德本位に學生の個性をそれぞれに活かしてゆき、彼等の人格を鍛鍊することが何よりも必要だと信ずる。即ち知識方面に少しく進歩することが鈍くとも、道德方面にはすすん向上するやう、導くことがよいと思ふ。つまり立派な人物、徳のある人間を育てあげることが第一義的であらねばならぬ。

次ぎに日本の國體を十分に知らしめることが何よりも必要だが、中々、理論上、わかり易く之を説くことが、むづかしいから、國史教育をとほして、自然に日本國體の尊嚴を明かに了解させたい。勿論、國史を解釋するについては、西洋流の考へを以てしないで、純正日本精神の觀點から、これを正解するのが妥當である。

このごろの中學生の有様については、正確に知つてをらぬので、或は見當ちがひがあるかも知れぬが、彼等は概ね西洋史の方は割合によく知つてゐるやうであるけれども、肝腎な日本歴史の

知識が極めて貧弱であり、稀薄であるやうに見受ける。それは歐米崇拜の餘波により、依然、西洋史を重視し、日本史を輕視するがためか、それとも他に何らかの原因が伏在してゐるのか知らぬが、もつと日本史の知識を十分に彼等の頭腦に注入し、時としては、これを開發しなくてはならぬ。

それから日本文化學の知識を授けることも亦必要である。現在、日本文化學は、まだ何人によつても組織されてはをらぬ。けれども日本國民たる以上、日本文化の本質について具體的に知るところがなければならぬ。過去においては、歐米追隨の思想から、西洋文化研究に没頭し、日本文化の研究を度外視して來たが、今後は、自家の大寶物——日本文化の種々相を再認識し、あらゆる創造をしなければならぬ。

この意味からすると、日本文化學の知識を學生に與へることが、一個の急務だ。それに加ふるに、日本道德學とか、日本倫理學とか、左様した學問をも授けねばならない。また神道について一般的知識を與へて置く必要もあらう。或は武士道學の要領を呑込まして置くのも無用ではあるまい。かうした方面も、在來、兎角閉却せられ、道德、倫理といへば、西洋のものに限るが如く思惟され、時としては支那的な方面のみを高調すると云つた具合で、日本独自の面目を發揮す

るところに達しない氣味が多かつたやうに考へる。それに日本の誇りであるところの婦道も亦當然學的に闡明せられねばならぬと同時に、小學、高等女學校の生徒に向つて、日本婦道がいかに優れた傳統の上に生きて來たかを知らしめる必要もあらう。かうした方面は、在來、兎角輕視せられたが今後はこれを自發的に重視しなければ、教育革新の意義を發揚することはむづかしい。

以上、日本精神を中樞とする教育について語つたが、次ぎには政治・經濟・社會その他の革新について述べる必要ならぬ。けれども既に豫定の紙數が盡きてゐるので、この點は他日に譲りたい。要するに、根本の問題は「日本精神とは何ぞや」といふ事になり、それが解答は、不完全ながら、既に提出したのであるから、一先づ茲に擱筆する。

日本精神とは何ぞや (終)

228

昭和十年二月二十八日印刷
昭和十年三月四日發行

【定價金拾錢】

著者 高須芳次郎
發行所 東京市赤坂區溜池町一番地三會堂内
印刷者 森清人
印刷所 東京市神田區小川町二丁目五番地
政弘社印刷所

發行所 東京市赤坂區溜池町、三會堂内
日本精神協會
電話赤坂(48)〇一九三番
振替口座東京三五七五番

「日本精神協會」趣旨書

いまやわが日本は、決然一大轉換を行はねばならぬ時機に臨んでゐる。一大轉換とは何ぞ、歐米追隨の態度を久しく續けて來た不見識をやめ、皇道日本精神に基き、一切の改造改革を行はねばならぬこと即ちこれだ。現代日本が目ざましい發達を遂げたのは、明治維新により日本精神の目ざめを見たからである。しかし一方において餘りに歐米模倣を事とした結果、利弊合せ伴ひ、つひに今日の行き詰りをみたのである。この内外多難の日本を、新希望、新光明の世界へ導き出すためには、進んで皇道精神を宣揚し、先づ純粹な日本精神に立還つて、そこから新しく出發しなくてはならぬ。日本精神は、中正・公明であり、調和、統整の美を備へてゐる。かうした精神を土臺として、歐米的不純分子を取り除き、そこから獨特の創造作用を爲すことが日本を正しく明るく生かす道である。古來日本は、道義建國の大精神に起ち、積極、進取

開發の諸長所を兼ね備へ、中正・公明の旨を各方面に明示した。西洋の如く物質本位に傾かず、支那・印度の如く精神本位に囚はれず、よく宇宙の大生命力に即して、物心二面を統制し、世界に比類なき文化を建設したのである。以上の如く、最も誇るに足るべき日本文化の土臺をなすところの日本精神を宣揚することは、目下の急務である。一切の希望・光明は、ここから生ずる。

本會はこの方針目的のもとに生れ、海の内外に亘つて教化運動を起し、日本精神作興に力めんとするものである。教育の革新、赤化思想の征服、日本學の建設等、本會の爲さんとする仕事はなかく多い。われ等は時勢に鑑みて發奮努力し誠心誠意如上の大目的に向つて邁進したいと思ふ。切に大方の支持と聲援とを切望する次第である。

昭和八年十一月三日

會員規定(拔萃)

- 一、本會ノ趣旨ニ賛成シテ加盟シ又ハ盡力セラル、方ヲ會員トス。
- 二、普通會員ハ年額會費金壹圓ヲ隲出スルモノトシ、之ニ對シテ本會機關紙「日本精神」(毎月一回發行)及ビ「日本精神パンフレット」(毎月一回發行)ヲ頒布ス
- 三、會員ノ特典左ノ如シ
 - 1、本會ノ主催スル講演會又ハ研究會ニ出席スルコトヲ得
 - 2、自己ノ意見ヲ機關紙上ニ發表スルコトヲ得
 - 3、百名以上ノ會員アル地方ニアリテハ隨時講演會開催ノ求メニ應ズ。但シ別ニ規定スル所ニヨル
 - 4、地方會員ノ上京ニ際シテハ本部ニ於テ宿舍其他ニ付キ特別ノ便宜ヲ與フ

日本精神協會

- 會 長 貴族院議員 菊池武夫
 陸軍中將男爵 高須芳次郎
 常務理事 森清人
- 理事 長 荒木貞一
 秋田 渡邊 敏
 石川 渡邊 敏
 市村 環之助
 潮田 寬
 加藤 治
 河原 文
 後藤 文
 佐藤 文
 佐藤 文
 澤田 文
 四王 天
 重光 天
 末次 信
 徳富 猪一郎
- 顧問 (順番十五) 柳川平助
 南川治
 皆川長
 三邊參
 三上鶴
 丸山鶴
 松岡洋
 眞崎甚三
 本多熊三
 藤田尚
 平沼一
 土方久
 林銑十郎
 八田嘉
 等々方森藏
 森清人

★ 典聖の貴最高最界世 ★

大日本詔勅謹解

◇よせ徹に髓眞の神精本日てし讀拜を勅詔御の代歴◇

見よ、全日本國民魂の書!!

本書は、皇祖以降今上陛下に至る重要詔勅約四百九十餘詔を、六篇六巻に類聚謹解し、別に「詔勅と日本精神」の一巻を加ふ。

全七巻完成

- | | | | | | | |
|---------|-----|-----|-----|-----|------|------|
| 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 詔勅と日本精神 | 雜治事 | 政經濟 | 神祇佛 | 軍事外 | 道徳文教 | 思想社會 |
| | | | 篇 | 篇 | 篇 | 篇 |

◇ 裁 體 ◇

- ◇ 菊判絹布厚表紙
- ◇ 四百頁
- ◇ 本文總振假名
- ◇ 詔勅十
- ◇ 二ポイント
- ◇ 九ポイント
- ◇ 特別に備考欄を設けて大意を補足し、拜讀に便ならしむ

呈贈本見容内

會 費

一時拂 金二十一圓(申込金三圓は申込と同時に拂込
毎月拂 金十八圓(第一回配本と同時に拂込)
書留送料 金三圓六回拂込(申込金三圓は第七回拂込に
充當) 一巻三十三錢

發行所

東京市赤坂區溜池町(三會堂)
日本精神協會
振替東京三三三番 電話赤坂〇二五番

終

4
7